

メディア・リテラシーの視点を取り入れた 小学校における情報教育カリキュラム開発の試み

Development of Curriculum for Information Education Including Media Literacy at Primary School

望月 純子

MOCHIZUKI Junko
(和歌山市立四箇郷小学校)

野中 陽一

NONAKA Yoichi
(附属教育実践総合センター)

小学校ではコンピュータの導入が進み、「情報教育」が行われている。ところが、コンピュータなどの機器の操作方法を覚えることばかりが意識され、メディアの特質を意識して情報発信したり他の人が発信した情報を活用したりすることはあまり行われていない。これからの社会を生きていくためには、子どもたちもメディアを使いこなす能力が必要である。メディア社会で生きる力を育成するためのカリキュラム開発とその評価について報告する。

キーワード：メディア・リテラシー、情報教育、カリキュラム開発、授業実践、情報活用の実践力

1. はじめに

初等中等教育における情報教育について、文部科学省（2002）は、「情報教育の実践と学校の情報化～新『情報教育に関する手引き』～」の中で、次のように述べている。

「情報化に対応する教育」あるいは「教育の情報化」の目的は、①子どもたちの情報活用能力の育成すなわち体系的な「情報教育」の実施に加え、②各教科等の目標を達成する際に効果的に情報機器を活用することを含むものである。

すなわち、初等中等教育における「情報教育」は、「生きる力」の重要な要素として、中学校技術・家庭科や高等学校情報科にとどまらず、教育活動全体を通じて、「情報活用の実践力」「情報の科学的な理解」「情報社会に参画する態度」の三要素から構成される情報活用能力をバランス良く、総合的に育成することを目標としている。

一方、広くメディアの多元化の中で注目されるのが、総合的にメディアを利用するための能力を示すメディア・リテラシーの概念である。

旧郵政省「放送分野における青少年とメディア・リテラシーに関する調査研究会報告書」（2000）によれば、メディア・リテラシーは、以下の構成要素からなる複合的な能力である。

①メディアを主体的に読み解く能力。

ア 情報を伝達するメディアそれぞれの特質を理解する能力

イ メディアから発信される情報について、社会的文脈で批判的（クリティカル）に分析・評価・吟味し、能動的に選択する能力。

②メディアにアクセスし、活用する能力。

メディア（機器）を選択、操作し、能動的に活用する能力。

③メディアを通じてコミュニケーションを創造する能力。

特に、情報の読み手との相互作用的（インタラクティブ）コミュニケーション能力。

小学校の学習において、情報活用能力やメディア・リテラシーの育成に関わる学習活動は、教科や総合的な学習の中で行われているケースもあるが、これらを総合的に扱ったカリキュラムは見あたらない。本研究では、小学校段階の情報教育カリキュラムに、メディア・リテラシーの要素を組み入れたカリキュラムを開発し、実践を通して評価した結果について報告する。

2. 情報教育とメディア・リテラシーの関連

情報教育の目標（文部科学省、2002）とメディア・リテラシーの定義（旧郵政省、2000）について、ねら

い、背景、情報の範囲、視座の項目で比較してみると、表1のように整理できる。

情報教育やメディア・リテラシー教育の背景には、現在の社会をそれぞれ「情報機器が発達し、情報の価値が高まり、情報の量が増大していく社会（高度情報化社会）」、「メディアが政治・経済・文化・個人の意思決定などに大きな影響をもつ社会（メディア社会）」と捉えており、双方ともそのような社会において「生きる力」が必要であると主張されている。

情報の範囲は、情報教育では「必要な情報」であり、メディア・リテラシーでは、「メディアから発信される情報」である。

視座については、情報教育とメディア・リテラシー教育で育成する目標は基本的には異なるが、「必要な情報」「メディアから発信される情報」を分析し、客観的に捉えて、活用していくという点では共通している。

また、情報教育とメディア・リテラシー教育の重なりについては、表2のように整理した。

こうしてみると、これら二つの教育は、同じ場面で発揮される力を育てようとしていると捉えられる。ただ、その見え方や表れ方、記述の仕方に違いがあるだけで、情報教育とメディア・リテラシー教育で育てようとしている力には共通したものが多いと考えられる。

留意すべき相違点としては、メディア・リテラシーでは、「情報を批判的（クリティカル）にみる」ことが強調されていることである。クリティカルは、必ずしも否定・肯定に区分できない内在的な批評の意味で使われている言葉であるが、情報活用能力における「主体的な情報活用」よりも、より分析的な見方を求めていると考えられる。情報活用能力では、情報の科学的な理解において、「自らの情報活用を評価・改善するため」という文言が入っていることがあげられる。情報手段や情報科学を理解することにとどまら

ず、これらの知識を得ることによって情報活用の在り方を見直すことが盛り込まれているのである。メディア・リテラシーの構成要素との関連は明確ではないが、発展的な内容と考え、コミュニケーションの創造の欄に分類した。

3. メディア・リテラシーの構成要素

総合的なカリキュラムを開発するに当たって、さらにメディア・リテラシーの構成要素を検討した。水越・中橋（2002）は、新しい学力としてのメディア・リテラシーの構成要素を、「メディア（機器）を使いこなす」「メディア（マス・機器・メッセージ）を理解する」「メディア（マス・メッセージ）の読解、解釈、鑑賞」「メディア（マス・メッセージ）を批判的に捉える」「考えをメディア（機器・メッセージ）で表現」「メディア（機器・メッセージ）での対話とコミュニケーション」の6つに分けている（表3）。

これらを旧郵政省による「放送分野における青少年とメディア・リテラシーに関する調査研究会報告書」（2000）の「メディア・リテラシーの構成要素」と比較してみると、ほとんどが対応関係にあった。しかし、水越・中橋（2002）の構成要素の内容は、メディアに関する学習に初めて触れる小学生にとってはレベルが高いため、すべてを取り入れるのは難しいと考えた。たとえば、「メディアを理解する」のc（メディアはどのような影響力をもっているか）、「メディアの読解、解釈、鑑賞」のa（視聴能力）・b（行間・背景を読む力）・c（多面的な視点から評価することができる）、「メディアを批判的に捉える」のb（送り手の信条・立場・考え方を捉えることができる）・c（多面的な視点からクリティカルに読み解くことができる）などである。これらについては、子どもたちの学習過程における状況に応じて、取り入れることにする。

表1 情報教育の目標とメディア・リテラシーの定義の比較

	情報教育	メディア・リテラシー
ねらい	1. 情報活用の実践力 2. 情報の科学的な理解 3. 情報社会に参画する態度	①メディアを主体的に読み解く能力 ②メディアにアクセスし、活用する能力 ③メディアを通じてコミュニケーションを創造する能力
背景	「高度情報化社会」 情報機器が発達し、情報の価値が高まり、情報の量が増大していく社会	「メディアに支えられた民主社会」 メディアが政治・経済・文化・個人の意思決定などに大きな影響をもつ社会
情報の範囲	必要な情報	メディアから発信される情報
視座	客観的 分析的 科学的な理解に基づく 技術的、工学的 情報の質	客観的・主観的 批判的（critical） 社会的な文脈 社会的、文化的、経済的、芸術的 情報の作り手の意図

表2 メディア・リテラシーの構成要素と情報教育の目標の関連

		メディア・リテラシーの構成要素		
		メディアを主体的に読み解く	メディアにアクセスし、活用する	メディアを通じてコミュニケーション創造する
情報活用能力	情報活用の実践力	メディアから発信される情報について、社会的文脈で批判的（クリティカル）に分析・評価・吟味し、能動的に選択する能力	メディア（機器）を選択、操作し、能動的に活用する能力	情報の読み手との相互作用的（インタラクティブ）コミュニケーション能力
		必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造できる	課題や目的に応じて情報手段を適切に活用する	受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる
	情報の科学的理解	情報を伝達するメディアそれぞれの特質を理解する能力		
		情報活用の基礎となる情報手段の特性の理解	情報を適切に扱う	自らの情報活用を評価・改善するための基礎的な理論や方法の理解
	情報社会に参画する態度	メディアから発信される情報について、社会的文脈で批判的（クリティカル）に分析・評価・吟味し、能動的に選択する能力		情報の読み手との相互作用的（インタラクティブ）コミュニケーション能力
		社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響を理解		情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え、望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度

※メディア・リテラシーの構成要素が上段、情報教育の目標が下段、内容が複数の要素にまたがっているものは、重複して記載

表3 新しい学力としてのメディア・リテラシーの構成要素（水越・中橋、2002）

<ol style="list-style-type: none"> 1、メディア（機器）を使いこなす <ol style="list-style-type: none"> a. メディア（機器）の操作技術 b. 複数のメディア（機器）の使い分け c. 複数のメディア（機器）を組み合わせる 2、メディア（マス・機器・メッセージ）を理解する <ol style="list-style-type: none"> a. メディア（機器）がどんな特性を持っているか（一方向性・双方向性・広播性・即時性等） b. メディア（機器・メッセージ）にはどのような文法・表現技法があるか（フレーム・モンタージュ技法・音響効果編集等） c. メディア（マス・メッセージ）はどのような影響力をもっているか（責任・倫理） 3、メディア（マス・メッセージ）の読解、解釈、鑑賞 <ol style="list-style-type: none"> a. 視聴能力（内容把握・主題把握・先読み・映像段落・鍵シーン・特殊効果等） b. 行間・背景を読む力 c. 多面的な視点から評価することができる（価値判断を含む） 4、メディア（マス・メッセージ）を批判的に捉える <ol style="list-style-type: none"> a. 自分のイメージに偏った読み解きをせず、客観視することができる b. 送り手の信条・立場・考え方を捉えることができる c. 多面的な視点からクリティカルに読み解くことができる （場合によっては、社会的・文化的・政治的・経済的文脈も考慮する） 5、考えをメディア（機器・メッセージ）で表現 <ol style="list-style-type: none"> a. 特性を考慮し、表現技法を駆使した情報発信ができる b. 他者の考え方を受け入れつつ、自己の考え方を創出することができる c. オリジナリティのある情報発信ができる（クリエイティブ・センス） 6、メディア（機器・メッセージ）での対話とコミュニケーション <ol style="list-style-type: none"> a. 相手の解釈によって、自分の意図がそのまま伝わらないことを理解する b. 相手の反応に応じた情報の発信ができる c. 相手との関係性を深めるコミュニケーションができる

4. 小学校におけるカリキュラム開発

4.1. メディア・リテラシーの定義と構成要素

メディア・リテラシーの定義は、各国によって少しずつ異なり、それぞれの国の諸事情が絡んで教育内容が決定されている。

本研究では、メディア・リテラシーとは、「メディア社会に生きる力」であるという視点から出発し、旧郵政省による「放送分野における青少年とメディア・リテラシーに関する調査研究会報告書」(2000) の「メディア・リテラシーの構成要素」をベースに考えてきた。その結果、情報活用能力と密接に関連しており、日本におけるメディア・リテラシーの様々な定義から抽出した水越・中橋(2002)の構成要素とも、大きな相違は見られなかった。

そこで、本研究においては、小学生の発達段階に合わせて、育成すべき能力として、以下の4つを中心に考えることにした。

- ①メディアにアクセスし、活用する能力
- ②メディアそれぞれの特性を理解する能力
- ③メディアを主体的に読み解く能力
- ④メディアを通じてコミュニケーションを創造する能力

4.2. 先行事例の分析

次に、メディア・リテラシーに関する先行実践において、目標設定がどのようにされているのかを分析した。2000年以降のメディア・リテラシーに関する書籍・学会発表論文・ネットワーク上の実践授業事例を収集した。そして、それらの単元をメディア・リテラシー育成の構成要素と単元目標によって分類した結果、以下のことが確認できた。

＜ 学年・学習内容 ＞

- 小学校低学年の実践は見当たらなかった。
- 中学年では、主に「情報機器を活用する」「情報を発信する」ことを目的に授業が行われ、情報活用のための基本的なスキルやルールを学習し、「調べてまとめて伝えよう」という情報活用の実践力を育成する学習が多くみられた。
- 小学校高学年では、「メディアの特性を理解した」うえで、「メディアを通じて送られてくる情報を主体的に受け取る」、または、「メディアを活用して伝えたい情報を発信する」という授業が行われていた。特に高学年ではメディアの特性を理解することに重点がおかれていた。
- 中学校、高等学校では、映像・インタビュー番組の制作や鑑賞などを通して、メディアを批判的に読み解くことやメディアのメッセージを正しく理解する実践が多かった。国語の授業のなかでも、「広告」「ド

ラマ・映画」「テレビコマーシャル」「ニュース」などのメディアを扱い、メディアからの情報を分析・批評し、発信・交流する学習が行われていた。メディアとの関係を批判的(クリティカル)に見つめる実践が多く見られた。

- 国語科においては、メディアから発信される情報を批判的(クリティカル)に読み解くことを目的にした授業が行われていた。

＜ 教科 ＞

- 主に総合的な学習の時間のなかで行われていた。
- 教科では国語科が大半であったが、小学校においては、社会・図工、高校では、情報・倫理の教科でも学習が行われていた。

＜ 活用メディア ＞

- 小学校では、デジタルカメラ・パソコン・インターネット・新聞・手紙・パンフレット・ポスターが使われていた。
- 中学校や高校においては、新聞・パソコン・デジタルカメラ・テレビ・携帯電話・Webページ・ドキュメンタリー(映像)・広告・テレビコマーシャル・ニュースが使われていた。

＜ メディアにアクセスし活用する ＞

- 中学年において、メディア(機器)の操作や多数のメディアから適切なメディアを選択することを目標としていた。メディア(機器)の操作では、デジタルカメラやビデオカメラの使い方を知ることやインターネットのホームページで情報を集め、素材を取り込んで活用することが多く行われていた。メディアの選択では、課題に合わせて情報を収集・選択したり、複数のメディアを組み合わせたりして情報を集めることがあげられていた。

＜ メディアの特性を理解する ＞

- 中学年・高学年で、メディアの特性を理解することがあげられていたが、写真をとるときのアングルやフレームを変えることによって違った情報を伝えることができるというメディアの特性は、中学年・高学年のどちらにも含まれていた。
- メディアの特性を理解する目標は、ほとんどが高学年にあげられていた。
- 高学年での目標内容は、メディアの種類とその特徴(身のまわりにはさまざまなメディアがあり多くの情報を得ている・携帯電話のメリットやデメリットを知る)、メディアの形態(新聞などの印刷メディアは写真や文章を組み合わせで情報を伝えている)などがあげられていた。

＜メディアを主体的に読み解く＞

■中学年では、「情報は作り手が伝えたいことをもとに組み立てていることを知る」という目標が1つあったが、「メディアの特性を理解する」と同様、「メディアを主体的に読み解く」目標もほとんどが高学年で実践されていた。

■高学年での目標は、「情報には発信者の意図が含まれていること」「情報は構成したり組み立てたりすることができること」「情報は作られたものであること」「同じ情報でも受信者によって受け取り方が違うこと」があげられていた。

＜メディアを通じてコミュニケーションを創造する＞

■中学年では、調べてまとめたことを相手にわかりやすく伝えるということに重点がおかれていた。

■中学年において、「写した写真を使って発表・相互評価をする」という読み手の反応を受け入れ、送り手と読み手の相互理解を深める目標も含まれていたが、伝えたいことを明確にして、相手にわかりやすく伝えることが主な目標とされていた。

メディア・リテラシー教育の先行実践は、これらの構成要素や目標の分類から総じて考えると、各実践は目的と内容に応じて、複合的な能力を育成するかたちで行われていたが、①情報教育と混在している ②目標があいまい ③学年がバラバラ ④課題別で実践が行われていて体系的でない、ととらえることができた。また、小・中・高等学校とも、系統的にメディア・リテラシーを育成するためのカリキュラムは見当たらなかった。

4.3. 到達目標の設定

メディア・リテラシー育成の到達目標作成にあたっては、構成要素ごとに低学年・中学年・高学年に分け、各項目を設定した。

まず、坂元ら（1986）によるメディア・リテラシーの概念モデル（図1）を参考にして考えた。

「読み取る力」「活用する力」「制作する力」を中核

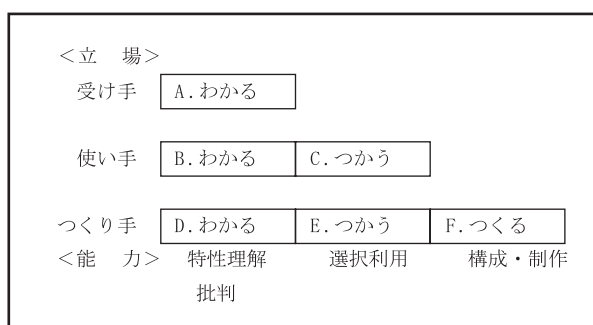


図1 メディア・リテラシーの概念モデル
(坂元ら、1986)

に据え、学習者の立場によってそれらを「受け手」「使い手」「つくり手」の3つに置き換えている。また、メディア教育によって形成されることが期待される資質・能力の観点から「メディア特性の理解力（わかる）」「メディア選択・利用能力（つかう）」「メディアの構成・制作能力（つくる）」の3つに分けた上で、この二つの軸を組み合わせ、多層性を表現している。図2のメディア・リテラシーの概念（各能力の関係）のAからFはそれぞれ次のような内容を持っている。

- A. 視聴能力あるいは、情報理解
- B. 利用法の理解
- C. 選択利用
- D. 制作法の理解
- E. 組み合わせ制作
- F. 構成制作

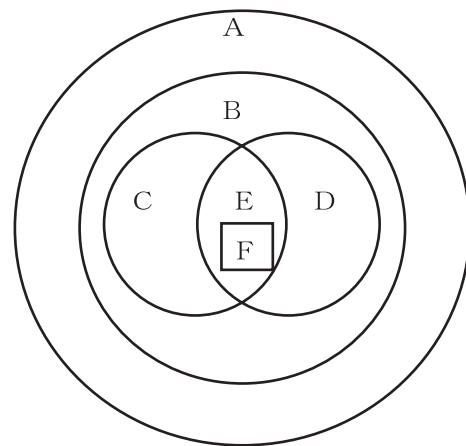


図2 メディア・リテラシーの概念
(各能力の関係) (坂元ら、1986)

以上のメディア・リテラシーの概念モデルを参考にし、指導要領の評価の観点である「関心・意欲・態度」、「思考・判断」、「表現・処理」、「知識・理解」を考慮しながら、発達段階に応じて各項目に関する目標の難易度を調整・序列化し、学年層ごとの目標を以下のように作成した。

☆メディアにアクセスし、活用する

「メディアにアクセスし、活用する」では、評価の観点の「関心・意欲・態度」や「表現・処理」に関する項目をあげた。その項目については、メディアと進んでかわり生かそうとする意欲・態度、また、メディアを使って情報を収集・選択できる知識・技術の育成を目標に考えた。

「関心・意欲・態度」では、低学年では「メディアに親しむ」、中学年では「メディアに慣れる」、高学年では「進んでメディアを活用できる」と設定した。

「表現・処理」では、「メディアを使って情報を収集・選択ができる」知識・技術の獲得を主な目標とし、低学年では「メディアを使って情報を集めることができる」、中学年では「伝えたいことに応じてメディアを選ぶことができる・メディアを使って情報を収集・選択ができる」、高学年では「伝えたいことに応じて効果的にメディアを選ぶ・他の情報と比較しながら必要な情報を収集できる」と設定した。

☆メディアの特性を理解する

「メディアの特性を理解する」では、評価の観点の「知識・理解」や「表現・処理」に関する項目をあげた。その項目については、メディアの特徴や特性に気づき、理解することを目標に考えた。

「知識・理解」では、低学年では「メディアの良さを感じることができる」、中学年では「メディアの種類や違いに気づく・情報には送り手と受け手があることに気づく」、高学年では「メディアの種類や違いを知る・メディアを構成する情報の種類を知る」と設定した。

「表現・処理」は、低学年からの制作活動の中で行うが、初期段階の目標であるため、低学年・中学年ではまずメディアを意識させることに重点を置き、「表現・処理」の目標は高学年のみとし、「メディアの特性を生かし表現できる」と設定した。

☆メディアを主体的に読み解く

「メディアを主体的に読み解く」では、評価の観点の「思考・判断」に関する項目をあげた。メディアからの情報を自分で判断して読み解くことを目標に考えた。

「思考・判断」では、小学校学習指導要領（文部科学省）「目標」の中に見られる思考・判断に関する発達段階の記述に着目すると（次項の「単元開発」を参照）、社会的な文脈の中で制作者の意図を読み解く力を育成するのは高学年が妥当であると考えた。そのため、「メディアの特性を理解する」の「表現・処理」と同様に、低学年・中学年ではメディアを意識させる項目に設定した。低学年では「メディアの中の世界と現実世界の違いに気づく」、中学年では「情報には正しいものと誤ったものがあることに気づく・情報は人に影響を与えるということに気づく」とし、高学年で思考・判断に関する項目として、「受信した情報が正しい情報かどうかを意識できる・情報には発信者の意図が含まれていることに気づく・情報は構成したり組み立てたりすることができることに気づく」と設定した。

☆メディアを通じてコミュニケーションを創造する

「メディアを通じてコミュニケーションを創造する」では、評価の観点の「表現・処理」の「表現」を主な目標とした。小学校段階での「表現」においては、「自分の伝えたいことを表現できる」と「相手の伝えたいことがわかり、自分の考えをもつことができる」ことを重点目標において、発達段階に応じてレベルをあげた項目に設定した。発信者側からは、低学年でまず、「自分の伝えたいことを表現できる」、中学年では、「自分の伝えたいことを絵図や資料を使って表現できる」、高学年では「自分の伝えたいことに応じて、表現の仕方を工夫することができる・適切なメディアを選択して、情報を伝えることができる」と設定した。また、受信者側からは、低学年では、「相手の伝えたいことがわかる」、中学年では、「相手の伝えたいことがわかり、自分の考えをもつことができる」、高学年では「相手の伝えたいことを理解し、自分の考えを伝えることができる」と設定した。

これらの内容を整理したものが、表4である。

4.4. 単元開発

メディア・リテラシー育成の単元を作成するにあたり、高学年カリキュラムを作成・実施し、検証することにした。

小学校学習指導要領（文部科学省）の中に見られる思考・判断に関する発達段階の記述に着目すると、例えば、社会科で言えば、第5・6学年で社会的文脈から事象の意味について考える力を育成することが示されている。その他の教科でも、高学年になって、より多面的な見方や客観的な判断を児童に求める目標が設定されている。

国語、社会、算数、理科の目標に見られる思考・判断の発達段階から、社会的な文脈の中で制作者の意図を読み解く力を育成するのは高学年が妥当であると考えた。

また、単元内容を設定するにあたっては、以下のことを考慮して、メディア・リテラシー育成の高学年カリキュラムを作成した。

■学年の行事や教科との関連を踏まえる。

- ・学年の行事では、5年生で新聞社の社会見学や加太合宿、6年生では、社会科の歴史学習ともかかわる紀伊風土記の丘の遠足や修学旅行などがあり、これらと関連付ける。
- ・教科との関連では、国語や社会の単元と合わせる。

■作品作りや発表する場（発信する場）を設定できる単元を選択する。

- ・低・中学年の学習活動において、メディア（機器）を選択、操作し、活用する経験が乏しい子どもたちであるため、作品作りを通して、情報を表現する場

表4 メディアリテラシーの低中高学年別到達目標

構成要素		目標
メディアにアクセスし活用する	低	①メディアに親しむ ②メディアを使って情報を集めることができる
	中	①メディアに慣れる ②伝えたいことに応じてメディアを選ぶことができる ③メディアを使って情報を収集・選択ができる
	高	①進んでメディアを活用できる ②伝えたいことに応じて効果的にメディアを選ぶ ③他の情報と比較しながら必要な情報を収集できる
メディアの特性を理解する	低	①メディアの良さを感じることができる
	中	①メディアの種類や違いに気づく ②情報には送り手と受け手があることに気づく
	高	①メディアの種類や違いを知る ②メディアを構成する情報の種類を知る（文字・音声・画像） ③メディアの特性を生かし表現できる
メディアを主体的に読み解く	低	①メディアの中の世界と現実世界の違いに気づく
	中	①情報には正しいものと誤ったものがあることに気づく ②情報は人に影響を与えるということに気づく
	高	①受信した情報が正しい情報かどうかを意識できる ②情報には発信者の意図が含まれていることに気づく ③情報は構成したり組み立てたりすることができることに気づく
メディアを通じてコミュニケーションを創造する	低	①自分の伝えたいことを表現できる ②相手の伝えたいことがわかる
	中	①自分の伝えたいことを絵図や資料を使って表現できる ②相手の伝えたいことがわかり、自分の考えをもつことができる
	高	①自分の伝えたいことに応じて、表現の仕方を工夫することができる ②適切なメディアを選択して、情報を伝えることができる ③相手の伝えたいことを理解し、自分の考えを伝えることができる

を繰り返し学習に取り入れ、メディア（機器）を操作できる能力の育成につなげたい。

- 子どもたちは、自分の思いや考えについて発表することを好まず、また、自分の思いや考えを相手に伝えよう、伝えたいという態度や意識があまり見られないため、情報を発信する場を繰り返し学習に取り入れ、「メディアを通じてコミュニケーションを創造する」能力の育成につなげたい。

以上のことを踏まえて、高学年カリキュラム（表5）を作成した。表中の数字は、メディア・リテラシー育成の目標（表4）の項目内容を示している。

このカリキュラムは、メディア・リテラシーを育成するための初期段階のものであり、担任教師が違って子どもたちが同じようにメディア・リテラシーを育成できるように、各学年の教科や行事との関連を考慮

し、週3時間ある総合的な学習の時間で取り扱えるように作成した。

5. カリキュラムの評価

5.1. 検証授業による評価

開発したカリキュラムについて、6年生3クラスを対象に検証授業を行った。具体的な指導計画及び授業記録は、望月（2006）を参照のこと。

授業観察や子どもたちの学習履歴の分析から以下の成果が見られた。

まず、これらの授業を通して、子どもたちがメディアについて意識するようになったことである。身のまわりには多様なメディアがあり、情報を伝える手段やものがたくさんあることに気づいた。自分が情報を発信し

表5 開発した高学年カリキュラム

5年生カリキュラム							6年生カリキュラム						
月	時間	内容	メディアに アクセスし 活用する	メディアの 特性を 理解する	メディアを 主体的に 読み解く	メディアを通 じてコミュニ ケーションを 創造する	月	時間	内容	メディアに アクセスし 活用する	メディアの 特性を 理解する	メディアを 主体的に 読み解く	メディアを通 じてコミュニ ケーションを 創造する
4	3	自己紹介しよう 紹介カード作成→発表→振り返り (自分と友だちの評価から)	②	③		①・②	4	3	自己紹介しよう 紹介カード作成→発表→振り返り (自分と友だちの評価から)	②	③		①・②
	5	お気に入り写真展 デジカメの写真を使って発表・ 相互評価 (アングルやフレームを変える)	①	③		①		5	お気に入り写真展 デジカメの写真を使って発表・ 相互評価 (アングルやフレームを変える)	①	③		①
5	12	新聞社の見学(社) 調べて(事前調べと見学) まとめて発表	①・③	②・③	②	①・②	5	15	「紀伊風土記の丘」の ガイドブックを作ろう(国) 調べて(事前調べと見学) まとめて発表	①・③	②・③	②	①
6	3	メディアってなんだ? デジタル教材や提示資料を使って ゲーム・ワークシート→話し合い 〇〇の気持ち	①	①		③	6						
	4	1枚の写真から伝えたいことを 考え加工して表現する→発表	①	③	②・③	①・③							
7	6	合成写真 どんなところで使われているか 良さや困る点を考える テーマを決め合成写真を作成 タイトル・お話をつくって発表	①	②・③	②	①・③	7	6	新聞記事を比べてみよう 同じ事件を扱った新聞記事を 複数集め、写真の使い方や 見出しの文章を比べて話し合う →新聞作り	①	②・③	②	①
9	10	キャッチコピーライターになろう CMを観て、感想を発表 どんな相手を対象にしているか キャッチコピーの役割	②	②・③	②	①・②・③	9	6	「修学旅行のしおり」を作ろう 調べてまとめる (グループで分担)	①・②・③	②・③	②	①
10		CMを決め、キャッチコピーを考える CMを作り、発表をする 相互評価					10	4	「修学旅行の発表会」をしよう ポスター・スライドショー・ビデオ などのメディアを使って作成・発表	①・②	②・③	②	①・②
11	3	メディアを知ろう! 写真に言葉や音楽を組み合わせ 感じ方の違いを知る		②	③	③	11	8	インタビューを編集しよう インタビュー資料を作る→ インタビューをする→編集する →発表→相互評価			②・③	①・③
12	2	チャレンジ! CMづくり デジタル教材を使って 「メディアってなんだ?」 ゲーム→振り返りカード→話し合い		②	②・③	③	12	2	お話を作ろう(組写真) 5枚の写真からお話を作る	①	②	②・③	①
1	10	ニュースを伝える(国) 伝え方を選ぶ新聞・校内放送・ 全校テレビ放送 ニュースを探す→伝えることを 決める→まとめる→発表する→ 相互評価	①・②	③	①・②・③	①・②	1	10	楠見東小の思い出 写真や映像を編集して ビデオ作品にする	①	②・③	②	①
2		2											
3	2	1年のデータを整理しよう 保存してある写真や作品をCD などに保存して作品集を作る	①	③			3	2	1年のデータを整理しよう 保存してある写真や作品をCD などに保存して作品集を作る	①	③		

たり、自分の考えや思いを適切に相手に伝えたりするときには、メディアの特徴や特性を理解した上で、使い分けが必要だと考えるようになったのである。

特に映像メディアについては、さまざまな表現技法が使われており、それは、送り手の意図によって構成されていることを理解した。また、情報は受け手の受け止め方によって、違った伝わり方をする場合がある

こともわかり、自分が情報を発信するときには、これらのことを考えながら情報を伝えるという意識が高まった。さらに、メディアが自分たちの生活を支え、豊かにしていることに気づき、なくてはならないものととらえるようになり、メディアの便利さや必要性などを強く感じた。

検証授業の結果から、小学校段階でのメディア・リ

テラシーの育成においては、まず、メディアの種類やその特徴・メディアの特性を知り、その上でメディアからの情報がどのように表現・構成されているかを知ることが効果的であり、メディアを理解する基礎的な力となることがわかった。

しかし、知識としてメディア・リテラシーを学習するだけでなく、体験的な活動の中で実際に利用する活動が重要である。この場合、メディアを理解するために情報スキルの活用も必要不可欠で「情報の発信体験」と「情報の受信体験」と「情報スキル（メディア）の活用体験」のバランスを考え、取り組むことが重要である

5.2. 情報活用の実践力調査による評価

実践授業を始める前に、高比良ら（2001）による「小学生版情報活用の実践力尺度」を使い、情報活用の実践力調査を行なった。この結果から各能力の情報活用の実践力をみると、収集力が高く、判断力・処理力が低いことがわかった。

検証授業後、12月中旬に2回目の情報活用の実践力調査を行った。5月と12月における各能力の平均値を比較した結果、判断力、表現力、処理力、発言・伝達力において、有意な差が見られた。中でも、判断力と処理力に大きな有意差があることが明らかになった。なお、収集力、創造力においては、本授業を行ったことによる顕著な変化は見られなかった。

これらの結果、以下のようなことが考えられる。

一つ目に、本研究におけるメディア・リテラシー育成のカリキュラムにより、どの子どもも情報活用の実践力が高まったと考えられる。しかし、学習した内容に依存しており、経験のない、または、学習していない内容については、向上につながっていないことがわかった。

二つ目に、学力の高い子どもは、情報活用の実践力調査でも高得点を取っていたことから、既習の力（学力）も、情報活用の実践力に関係することが推測される。しかし、学力の低い子どもでも、各能力の平均得点は高くなっていることから、学力の低い子に対して、これらの学習は有効であると言える。

三つ目に、2回の調査で、得点が伸びた子どもと、逆に低下した子どもについて考察したい。伸びた子どもは、学習内容を理解する能力が高い子どもは勿論であったが、学力に関係なく、学習を通じてどのくらいメディアの便利さや必要性を感じることができるか、というメディアの意識度に大きくかわっていた。それらは、伸びた子どもたちの学習中の発言やワークシートからうかがえた。しかし、低下した子どもはこの

意識度が低かったわけではない、メディアや情報について学習し、いろいろなことを知ったことで、自らの実践力についてより厳しい評価をするようになった結果、調査結果の数値が下がったケースが多数含まれていることが推測される。

6. まとめ

メディア・リテラシー育成のための教育は、小学校低学年から実践し、発達段階に応じた学習内容を継続的に行うことで、育成されたものが積み重ねとなり、しっかりとメディア・リテラシーが確立していくものと考ええる。

今後ますます、多様なメディアによって多くのさまざまな情報を得ることになる。そういった社会に生きる子どもたちに、このようなメディアを読み解き、積極的に情報を発信できる力を育てること、そして、そのことによって、メディア社会を主体的に生きていく力を育てる、すなわちメディア・リテラシーを持った子どもを学校教育の中で育てていくことは極めて重要な課題になると考えている。

注：本論文は、和歌山大学教育学研究科修士論文「メディア・リテラシーの視点を取り入れた情報教育—小学校におけるカリキュラム開発の試み—」望月純子（2006）をもとに修正加筆したものである。

参考文献

- 旧郵政省（2000）「放送分野における青少年とメディア・リテラシーに関する調査研究会報告書」 http://www.soumu.go.jp/joho_tsusin/pressrelease/japanese/housou/000623j701.html
- 坂元 昂・後藤和彦・高桑康雄・平沢茂（1986）「メディア教育を拓く」ぎょうせい
- 高比良美詠子・坂元章・森津太子・坂元桂・足立にれか・鈴木佳苗・勝谷紀子・小林久美子・木村文香・波多野和彦・坂元昂（2001）「情報活用の実践力尺度の作成と信頼性および妥当性の検討」日本教育工学会論文誌，24，pp. 247-256
- 水越敏行・中橋雄（2002）「新しい学力としてのメディア・リテラシー ～その研究と実践をどう進めるか～」日本教育工学会第18回全国大会講演論文集 pp. 97-100
- 文部科学省（2002）「情報教育の実践と学校の情報化～新情報教育に関する手引き」 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/020706.htm